

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】今里 基

【所属】(助成決定時) 立命館大学大学院先端総合学術研究科

【研究題目】

韓国ソウルの日本空間を形成するエスニックビジネスの研究

【研究の目的】(400字程度)

人類学者のマルク・オジェ(2002)は空間研究において「場所」をアイデンティティ付与的、関係的、歴史的なものとして定義し、それらを否定する空間(例えば空港やショッピングモール)を「非-場所」と定義、特に「非-場所」の増殖を問題とした。またグローバル化の浸透に伴い、人々は空間の中でグローバルなものと同ローカルなものを同時に経験するようになった(岩谷 2017)。韓国では2000年前後の日本文化開放やワールドカップ日韓共催などの結果、居酒屋や日韓交流スペースなどの日系ビジネスが増加するようになった。特にそれら店舗が集積したのが「リトル東京」と言われる東部二村洞ではない、若者の街である弘大・新村・梨大地区であった。本研究では同地区に存在する「日本空間(日本関連のエスニックビジネス)」において「日本」を媒介に、「日本人」と「韓国人」らがその空間を「場所」として位置付ける過程と、言語的・身体的な関わりから場所をめぐる共生の技法を検討する。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は主に弘大・新村・梨大地区を中心としたソウルの日本人の歴史に関する史料分析(歴史編とする)及び同地区のフィールドワークで構成される。歴史編では1965年の日韓国交正常化後、ソウルにおいて日本人駐在員居住区である東部二村洞に相對する、若者の街かつ日本人留学生が多く集まる弘大・新村・梨大地区について、日本関係の店や企業が集積するようになった歴史的背景をソウル特別市の市史及びソウル歴史博物館が公開する『ソウル歴史アーカイブ』、新聞などから史料を収集した。また、それとは別にソウル在住歴が20年以上の日本人に対するインタビュー調査を実施し、2003年に始まる韓流以前の在韓日本人の生活環境、その後について把握を試みた。これらの調査から、先行研究で「日本人だけの『閉じた空間』が韓国人と共生することで『開く』ようになった(浅田 2009)」と言われた東部二村洞と、はじめから「開かれた空間」の中に形成された「日本空間」が、なぜエスニックコミュニティではない地域で展開されているのかを明らかにすることを試みた。次にフィールドワークでは第一段階で、本研究で「日本空間」と定義される日本人経営の飲食店や企業、日韓交流スペースなどに対する参与観察を行った。参与観察では日常的なビジネスの様子、客層や主な特色などを整理した。第二段階で「日本空間」を運営している日本出身の経営者に対して、来韓及びビジネス開始の経緯、現在の取引の実態やビジネス上の課題、日本人及び韓国人、その他の外国人との関係等について聞き取り調査をおこなった。それを通して、空間研究におけるローカルの中にグローバルな空間が展開されている事例として、「日本空間」を二つの異なるエスニシティを持った人々が存在する事例とし、そのエスニシティを持った人々が共同で空間に関わるという過程を実証して示すことを目指した。

【結論・考察】(400字程度)

歴史編では調査地である弘大地区の日本関係の店の増加やその背景を検討した。文献調査の結果、同地区が2000年代以降に若者やメディアに注目され始めてから日本関係の店も急増し始めたことが明らかとなった。また、ソウル在住20年以上の日本人へのインタビューも踏まえると、彼らが居住し始めた80年代以降と比較して韓国での日本理解が進んだ結果、従来駐在員の居住地と勤務地に集中していた日本関係の飲食店

が、「クールな存在」として若者の街に展開するようになったと考えられる。フィールドワークでは、「日本空間」の例として日本人主催で定期開催する「カレー部」を参与観察した。特徴として韓国人は「日本空間」をあくまでも自分の関心の一つであり、文化の消費の一つとして捉えている側面が見られた。しかし、7月以降、韓国において不買運動が始まり、本研究では観察中に生じた「日本空間」におけるポストコロニアリズムな現象の疑問までは詳しく分析できず、継続調査することとなった。